

保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う 体験型学習プログラムに関する実証的研究 (7) ——米づくりを通して得られた「もの」との出会いと気づき——

竹 内 啓*・藤 川 志つ子**・近 藤 千 草***
菅 井 洋 子****・内海崎 貴 子*****

An Empirical Study on the Learning Program for Child-Care Givers- Based on Experiences of Interaction with People, Things and Events-(7) Encounters and awareness with things obtained through growing rice

Satoru TAKEUCHI, Situko FUJIKAWA, Chigusa KONDO
Yoko SUGAI, Takako UCHIMIZAKI

要 旨

本学幼児教育学科では本プログラムを一年次の必修科目として位置づけ、プログラムの学習による学生の変化、保育理解を深める教育方法等に関する研究を行い、報告書にまとめている。[箕輪、菅井、草信、近藤 他] 本報告は上記研究につながるものである。

体験学習として取り上げた米は主食であり幼児や保育者になる学生の接する日本の生活文化にも深く関わっている。米づくりでは自分の手で種モミから栽培し、収穫し炊飯して食べるという一連のサイクルを体験する。それにより植物の成長や関係する周囲の自然、食、文化も含めて学生が「ひと・もの・こと」に出会っていくことを目指した。

今回はその中で米づくりを通して得られた「もの」(生物を含む)との出会いがどのような気づきにつながったかに着目して学生の記述文をもとに分析した。

その結果、土や泥にふれる楽しさが興味深い言葉で表現された。また細い苗や小さな生物との出会いが慎重さや責任感を持って生命を見守り育てようという意識になり、さらに体験した驚きや発見を大切に伝えたいという意識への変化が認められた。これらは保育者としての重要な原体験になると思われる。

キーワード：体験学習、米、泥、もの、生物

*准教授 図画工作

**講師 障害児保育

***准教授 教育学

****准教授 発達心理学・保育学

*****教授 教育学

目的

今回、体験学習として取り上げた米は我々が毎日口にする主食であり、幼児や保育者になる学生の接する日本の生活文化にも深く関わっている。しかしながら、一般的に米は店で買うものであり、実際に米づくりを一から手作業で行ったことのある人は少ない。本学の幼児教育学科で行う米づくりでは自分の手で種モミから栽培し、収穫し飯盒で炊飯して食べるという一連のサイクルを体験している。米ができるプロセスを知ることにより人が米とどう関わっているかを学ぶことができる。また植物の世話をし継続して見守ることが、生命、そして幼児の世話をし見守ることに繋がり、繋がっていく。

この体験を通して米に関係して周囲の自然、食のあり方、文化も含めて学生が「ひと・もの・こと」に出会い、気付いていくことを目指した。本稿ではその中で特に米づくりを通して得られた「もの」（生物を含む）との出会いがどのような気付きにつながったかに着目して分析してまとめることを目的とした。（図1）

・米づくり(体験学習として)

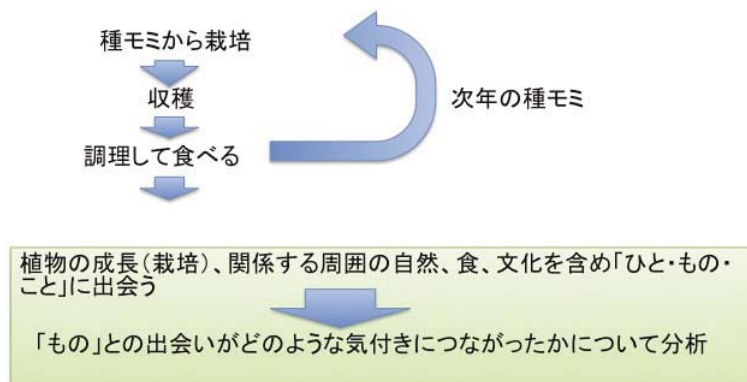


図1

研究方法

体験後、学生の記入した振り返りシートの記述内容を、「もの」との出会いと気付きの視点から分析した。

・体験期間 2012年4月23日～11月10日

保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う体験型学習プログラムに関する実証的研究（7）

・振り返りシート「米つくりで出会ったひと・もの・こと」

シートの回収：シート①田植え直後5月27日に実施73人から回収，シート②その後グループによる世話，観察，中間振り返り後7月28日，71人から回収。シートの質問項目は以下のとおりである。

振り返りシート①質問項目

- ・田植えまでの体験学習中どういう「ひと」と関わったか
- ・それはどんな関わりだったか
- ・どんな「もの」が目に入ったか
- ・苗を持った時、どんな感じがしたか
- ・苗を植える時、どんな感じがしたか

振り返りシート②質問項目

- ・田植え後の観察、世話の過程でどういう「ひと」と関わったか
- ・それはどんな関わりだったか
- ・どんな「もの」が目に入ったか
- ・稲の成長の過程でどんな「こと」があったか
- ・保育者の視点で気づいた点があるか

米つくりスケジュール

今回，行った米つくりの作業内容は以下のとおりである。

4月23日 塩水選： 稲の種（品種名ハレバレ）を塩水に入れ浮力の違いで底に沈んだ重いものだけを選別する塩水選を行った。そのあと60度Cのお湯で殺菌消毒してから種の芽出しをさせる為に水に浸した。

4月28日 種まき： 芽出しができた種を培養土を入れた育苗用ポットに各自，3粒くらいづつ撒いた。そのあとポットをプラスチック製衣装箱を利用した苗代に入れ，水に浸して成長させた。グループ当番による観察開始。（写真1）

5月27日 田植え： まず各自バケツに見分けがつき安いうに自由な絵と自分の名前を書いた。次にバケツに培養土，腐葉土，水を入れ手でよくかき混ぜた。（水田で行なう田起こし，代かき作業にあたる。写真2）そして成長した苗を一人3株ずつ丁寧に植え付け，水を深めに

竹 内 啓・藤 川 志つ子・近 藤 千 草・菅 井 洋 子・内海崎 貴 子

入れて田植え終了。(写真3) 作業後、振り返りシート①に記入。以後一週間に一度の水替えと観察を続けた。

6月22日 移動(避難): 季節外れの台風により稲が傷むのを避けるため、バケツごと校舎内に移動した。

6月25日 再移動: 天候が回復したため再びバケツを屋外に移動した。

7月12日 中干し: 稲の葉先が黄色くなり一部枯れたようになってきた。原因としては稲の根が酸素不足で呼吸できなくなっている事、肥料が十分吸できず栄養不足になっている事が考えられた。このため、数日間、水を抜き土に空気を触れさせる中干しと液肥を施す作業を同時進行で行なった。その際、バケツの水を捨ててしまうため発生していた大量のオタマジャクシ、メダカをすくい取り別のバケツに移動させた。(写真4, 5)

7月16日 写生: 成長した稲を観察しスケッチブックに写生。

7月28日 中間振り返り: 講義室でそれまでの写真などを見ながらの振り返り。保育者の立場から体験学習をどう捉えるのかについて話をしたあと、稲と並行して栽培していた野菜の収穫、稲の観察を行ない再び振り返りシートに記入した。シート②

夏休みに入るため、別のバケツで飼育していたオタマジャクシとメダカを校内の池に放流した。

8月24日 開花: 8月に入ると葉の先端は黄色のままだが、濃い緑色の部分が伸びて来て追肥の効果が出てきた。24日には開花を観測。数時間で受粉し養穂期に入った。(写真6)

10月8日 稲刈り: 刃先がノコギリ状の稲刈り鎌で各自、バケツの稲を一株ずつ刈り取った。藁で根元を束ねて構内の日当りの良い場所につり下げ、約3週間自然乾燥させた。(写真7)

10月29日 脱穀, モミ摺り: 割り箸でこそいで脱穀し、モミと藁を分離。次いで、採れたモミをゴムボすり鉢に少量づつ入れゴムボールを使用してモミ摺りを行った。この結果、全体で一升のモミから4合の玄米がとれた。通常はさらに精米して食べるが、手作業では大変な時間と労力が必要なことと全体量が少ないため玄米で食べることにした。(写真8)



写真1 4月28日 種まき



写真2 5月27日 田起こし，代掻き

竹 内 啓・藤 川 志つ子・近 藤 千 草・菅 井 洋 子・内海崎 貴 子



写真3 5月27日 田植え



オタマジャクシ

カエル

写真4



写真5 8月12日 一時、葉先が黄色くなったが持ち直した



写真6 8月24日 開花

竹 内 啓・藤 川 志つ子・近 藤 千 草・菅 井 洋 子・内海崎 貴 子



写真7 10月8日 稲刈り



写真8 10月29日 脱穀, 粳摺り

11月10日 飯盒炊爨：薪割り、カレーの調理とともに玄米は白米の2倍の量の水を入れ飯盒で炊いた。皿に盛りつけ、全員で「カレーライス之歌」をうたい「いただきます」の挨拶をした。約半年かけて一から自分で作った米の味をしっかりと噛み締めた。（写真9, 10）



写真9 11月10日 飯盒炊爨



写真10 カレーライス

結果

注「 」内は学生の記述

◎苗にふれて（シート①）

「細くて、折れそう、壊れそう」なイメージを持った学生が多かった。逆に「意外としっかりしている」「大きくなった」という人も少数いた。これは自分で種まきをして種モミの小さい時からを知っているからこそであると思われる。そしてより直感的に「生命を感じた」という学生もいた。（図3）

また植える時は「慎重に、大切に」植えたという記述が多い。細いために「不安」や「心配」する気持ちと成長を「楽しみ」にし「しっかり育てほしい」と願う気持ちを両方抱いたようだ。「私が責任を持って管理しないと育たない」と責任の意識もみられた。（図4）

土にふれて（シート①）

土や泥に対しての記述（75.3%）は苗（53.4%）よりも多かった。（図2）「楽しかった」「気持ちよかった」「懐かしかった」の他に「最初は嫌だった」という記述も見られた。記述から、日常では土に触れる機会がほとんどない様子が窺える。また「手が腐ったごっこ」をしたり「イタズラしている気分」であったりと、幼児期に体験した感覚を呼び覚ましているようだった。（図5）「小さい子は泥で遊ぶのを楽しみそうだ」と保育者の視点もみられた。一方、泥はグチャグチャ、ヌルヌル、ベチャベチャ、ドロドロ、ヌチャヌチャなど擬音の繰り返しで多く表現されている。人間の五感の内、特に触覚は意識下の感覚で軽視されやすい。泥を素手で触った感じというのは、擬音以外の日常的な形容詞では表現しきれない感覚であり、幼児教育においても原初的で重要な感覚であると思われる。言葉の発生にも関係してきて興味深い。（図6）

幼児期に体験した感覚に近い表現

- ・「手が腐ったごっこをした」
- ・「イタズラをしている気分だった」

保育者の視点

- ・「小さい子は泥で遊ぶのを楽しみそうだ」

◎生き物にふれて

5月のシート①では虫などの生き物を挙げた記述は少なかった。しかし7月のシート②ではオタマジャクシ、虫、トンボ、メダカ、カエルを挙げている。生き物が苦手な学生もいた。「私

振り返りシート

土や泥についての記述

55人 75.3%

苗についての記述

39人 53.4%

土や泥に対しての記述が苗よりも多かった。
(シート①)

図 2

◎ 苗にふれて (シート①)

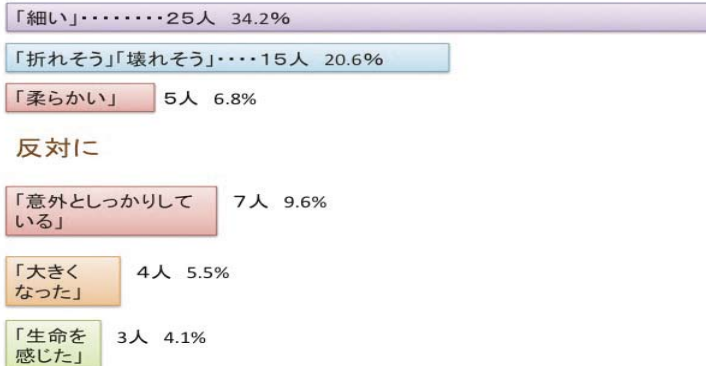


図 3

◎ 植える時 (シート①)



その他

- ・「自分で育てたもの(苗)を植える充実感があった」
- ・「私が責任を持って管理しないと育たない」

図 4

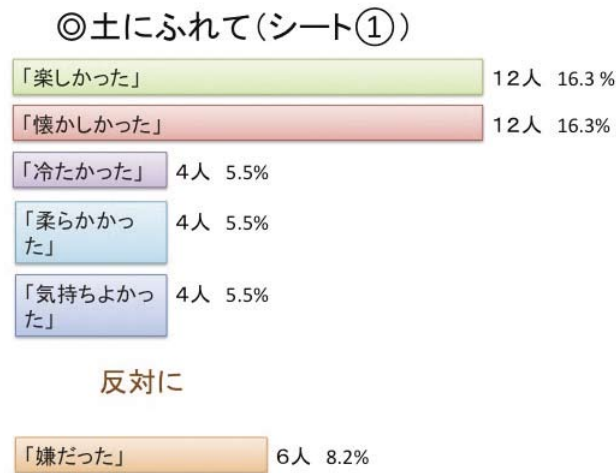


図5

は苦手なので逃げ出しました。... なんとか慣れよう触ってみようと思ったのですが無理でした。実際、自分が保育者になった時は自ら植物をかき分け、子どもたちに見本となれるようになりたい」というように保育者を意識して苦手なものに立ち向かう努力をした記述もみられた。

生き物でもっとも関心が高かったのは自然に発生したオタマジャクシだった。70.4%が印象に残ったことにあげている。「稲の水で新しい命が生まれた」と予期しなかった生き物との出会いに驚き、植物といっしょに見守ろうという姿勢が見られる。「立派なカエルになって欲しい」「カエルってたくましい」「カエルが卵を産んでオタマジャクシが生まれたのは凄いことだ」というように自然の力に素直に感嘆している。(図7, 8)

まとめ

土に触れる体験が様々な感覚を呼び覚ますこと、「稲が伸びていると嬉しさを感じる」というように「愛情や愛着」が湧いてきたこと、苗を持ったときの感触から扱いに慎重さと責任感を持つようになったこと、オタマジャクシなどの生き物も含めて生命を見守るという点で「子どもも同じように」と重ね合わせて捉えるなど、学生は、米つくりの体験を通して「もの」に出会って様々な気づきがあった。そして、これら学生自身が体感した「ひとつひとつの驚きや発見」を「子どもたちに大切に伝えたい」「ふれてもらいたい」というように、これらの気付



・原初的な感覚

・言葉の発生

・泥の擬音表現



その他

「ヌルヌル」「ベチャベチャ」「ヌチャチャ」
「ザラザラ」

「ムニュツ」「ブチュツ」「ニユルツ」

図 6

きはさらに能動的な意識へと変化している。このような能動的な意識を持った事は、これから保育者になる学生にとって重要な原体験、出発点になると思われる。体験した米つくりのプロセスを学生の意識の成長のモデルとしても捉え、生かしていくことを期待したい。（図 9，10）

米つくりに関しては後半、稲刈り，飯盒炊爨が行われた。その後に行なった米つくり全体を通した振り返りでは、「オタマジャクシが発生したこと」「台風の時，皆で協力してバケツを避

◎生き物にふれて(シート②)

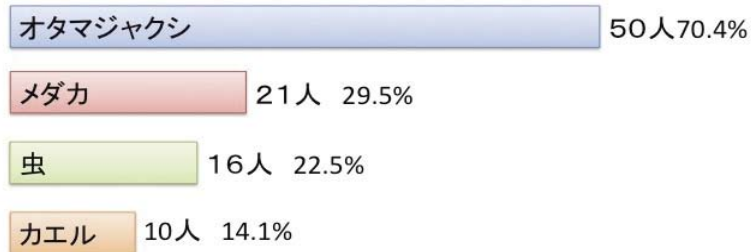


図 7

オタマジャクシに関連する記述

- ・「稲の水で新しい命が生まれた」
- ・「立派なカエルになって欲しい」
- ・「カエルってたくましい」
- ・「カエルが卵を産んでオタマジャクシが生まれたのは凄いことだ」



自然の力に素直に感嘆

図 8

難させたこと」などが印象深かったようだ。また「自分で育てたものを食べられるってすごい」「一粒一粒感じながら食べた」というように手をかけて育てることでもものの捉え方も大きく変化し価値を感じるようになったという意見が多くみられた。今後は次の年に種モミの一部を受け継いで生命のサイクルを繋げること、収穫後の藁を利用して正月の飾りを作ったり、関連した歌や遊びを学ぶこと等で文化的な理解にも広げて行きたい。

2012 年度は本プログラムとほぼ同時期に野菜の栽培、その他、外部講師の講演、また音楽・身体・絵画を合わせた表現、トイレ清掃、お手玉、指人形、保育現場への参加など広範囲な活

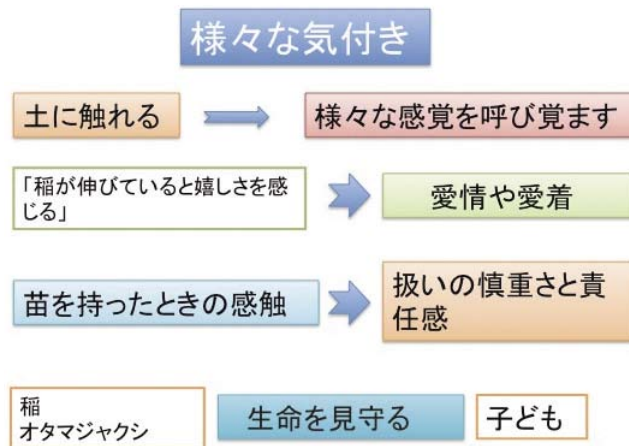


図 9

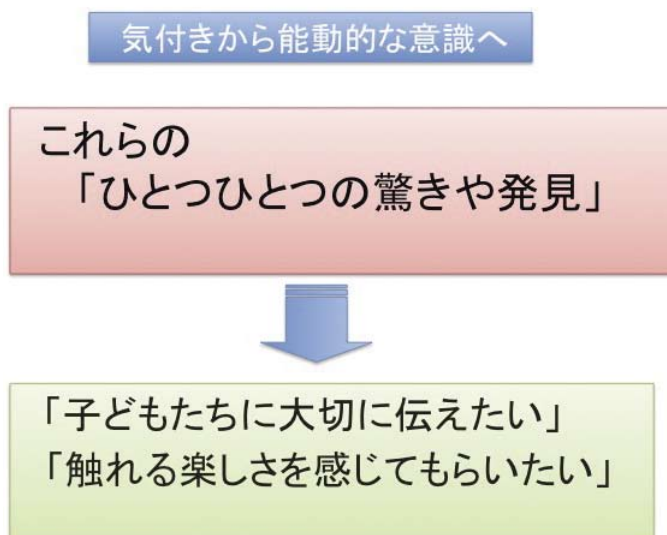


図 10

動が行われた。各プログラムをいかに関連させて「ひと・もの・こと」の出会いが深めるかを検討することが今後の課題である。

竹 内 啓・藤 川 志つ子・近 藤 千 草・菅 井 洋 子・内海崎 貴 子

参考文献

- 箕輪潤子・菅井洋子・草信和世・近藤千草・葉山 登・内海崎貴子,「保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う体験型プログラムに関する実証的研究 (1)～(5),『川村学園女子大学紀要 第二十三巻 第二号』, 2012
- 近藤千草・菅井洋子・箕輪潤子・森田玲子・近藤光江・竹内 啓・藤川志つ子・内海崎貴子,「保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う体験型プログラムに関する実証的研究 (6)『日本保育学会 研究発表論文集』, 2012
- 箕輪潤子・菅井洋子・近藤千草・森田玲子・近藤光江・竹内 啓・藤川志つ子・内海崎貴子,「保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う体験型プログラムに関する実証的研究 (7)～(8),『全国保育者養成協議会 第 51 回研究大会研究発表論文集』, 2012